

## ヨーロッパの傭兵

大森 海太

以前、早稲田の公開講座で菊池良生という大学教授（当時）兼作家の先生から聞いた話。古来傭兵とは売春に次ぐ古くからの職業で、華々しい戦争のプロとは裏腹に、自分の身を切り売りするしかない哀しい職業なりわいであった。

古代ギリシャの市民軍はポリスの没落で他国の傭兵となり、アレクサンドロス大王対アケメネス朝ペルシアの戦争では、双方のギリシャ人傭兵による戦いとなった。ローマ帝国では領土の拡大により、ゲルマン人など蛮族の傭兵が主力を占めた。

中世の領主に仕えた騎士たちは傭兵とは同義語で、戦争は格好の稼ぎ場となり、「傭兵は勝たず負けずの八百長戦」（マキャベリ）とまで言われた。

スイスでは傭兵が最大の産業でイタリア戦争のころからおもにフランスに仕え、フランス革命のときルイ十六世一家を守ったのもスイス人傭兵であった。アルプスの少女ハイジの遊び相手はいつもお爺さん、お父さんたちは傭兵で留守にしていた。

ドイツ南西部では傭兵隊長が零細農民や都市の難民を募集し、戦争請負を業とする「ランツクネヒト」が出現、三十年戦争では史上最大の傭兵隊長と言われたワレンシュタインが大活躍した。ポヘミア小貴族出身の彼は「戦争は戦争で栄養を取る」との発想で、雇い主の皇帝から軍税の徴税権を獲得して収奪のかぎりをつくしたが、やがてやり過ぎて暗殺された。

その後絶対王政の時代になると、傭兵隊はかつて王侯と対等であった戦争請負業者から宮廷のしもべと化し、隊長は軍人貴族となった。

時代は下って二十一世紀。NHKのテレビによると「ワグネル」と称するロシアのマル秘傭兵部隊はシリア内戦でアサド大統領について暴虐を繰り返し、今回のウクライナ侵攻でも前線に駆り出された。脱走したある幹部のインタビューでは、報酬はかなり高額であるものの、戦闘で命を落としたものは少なくないとのことである。

歴史は繰り返す。人間は賢い生き物と言われているが、でも本当はそんなに賢くないのかも知れない。